

# 共生力を育む感性的創造体験としての身体表現あそびの実践研究

—多様な人がつながるためのプログラム開発をめざして—

弓削田 綾乃\*

抄録

個々の感性に深く関わる身体表現は、「人が共に生きる力」を育む潜在性をもつ。なぜならば、他者とのかかわりの中で感じたことを表そうとすると、我々は身体のアンテナを研ぎ澄ませ、対象とつながろうと努力するからである。他者と出会い、関係性を築いていくプロセスは、自己の存在を再構築するプロセスでもあるだろう。本研究は、このような見地から、様々な年齢の子どもたちが集う地域活動の一つとして、身体表現あそびを試みた。

本研究は、地域で生きる多様な子どもたちの身体表現活動において、個々の表現と集団の表現とがどのような関係の上で生成されるのかを検証し、効果的なプログラムを提示することを目指した。その一方で、一緒に参加する保護者にも着目した。実施したのは、2013年9月から2014年2月までの約半年間、合計9回であった。

研究方法は、①表現あそびプログラムの実施、②記録とインタビューの検討、③保護者の感想の分析、の3つである。各結果をまとめる。

結果①：テーマ、物、音楽等に季節感、日常性、非日常性などを混在させ、個々のイメージ世界を深めることで、集団の表現に発展した事例が認められた。活動の最初と終わりに1対1での表現をとり入れたことで、他者との表現が促されたと考えられた。

結果②：子どもは自身の表現に夢中になる傾向があるが、次第に他者の表現を受け入れ、一緒に表現しようとする場面が認められた。

結果③：一緒に参加した保護者には、子どもに対する新たな気づきをもたらされていた。一方で、自身が身体表現することへの戸惑いや、我が子の行動への不満などがみられた。

以上のように、個々の表現から集団の表現へと移行するためには、個々の自由な表現を触発し、認め合い、共有しようとする雰囲気ならびに柔軟な内容が重要と考える。本研究では、問題をフィードバックしながら継続したことで、有効なプログラムの事例を提示できたと思われる。

キーワード：表現あそび、感性的創造体験、個の表現から集団の表現へ、地域活動

\* 早稲田大学オープン教育センター 〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104

# Practical Research on Playing with Physical Expression as a Sensible Creativity Experiment producing the Power of Coexistence

—Aiming at the Development of a Program for the Bond between Different People—

Ayano Yugeta \*

## Abstract

Physical expression deeply involved in individual feelings has the potential of fermenting “the power for humans to live together.” This is because when people try to express what they feel during interaction with others, they intensify communication and make more of an effort to communicate with others. The process in which people encounter others and establish a relationship with them may also involve the process of reconstructing their own existence. This research attempted to show the play of physical expression as the one of the activities of community where children of various ages met together.

This research aimed at verifying what kind of relationship existed between individual and group expression through physical expression activities of various children living in a community, and at presenting an effective program to create such coexistence. Meanwhile, the study also concentrated on the parents participating in this activity with their children. This research was conducted from September 2013 to February 2014 for about half a year, nine times in total.

The research method consisted of three stages: (1) implementation of the expression play, (2) examination of recordings and interviews and (3) the analysis of the parents’ impressions. The following is the conclusion of each of these items:

Result (1): As a result of exhibiting various things such as topics, objects, music, feeling the seasons, ordinary and non-ordinary things, the spreading of individual images was recognized and shared among the participants. This was possibly because one-to-one expression was introduced in the beginning, which promoted the expression of others.

Result (2): Children tended to get absorbed in their own expression, but they gradually accepted others’ expression, and as a result they tried to express themselves with others.

Result (3): The parents who participated together with their children discovered new information about their children. Meanwhile, the parents’ embarrassment in physically expressing themselves and dissatisfaction in the behaviors of their children were also recognized.

As shown above, in order for individual expressions to shift to group expression, a flexible atmosphere and contents are important where individuals stimulate individual free expressions, recognize each other and try to share the expressions of others. Because this research was continued by feedback about problems from participants, it was possible to present an effective case example of the program.

Key Words : Play of physical expression, Sensible creativity experiment,  
Own expression and others’ expression, Community

---

\* Waseda University Open Education Center 1-104 Totsuka-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050, Japan

## 1. はじめに

個々の感性に深く関わる身体表現には、「人が共に生きる力」を育む潜在性があると考えられる。なぜならば、他者とのかかわりの中で感じたことを表そうとすると、我々は身体のアナテナを研ぎ澄ませ、対象とつながろうと努力する。身体表現は、こうした受信と発信とを繰り返すことで成り立つものであり、この経験を重ねることが、人と人、人とモノとが互いに尊重しあい、自然に交じりあうための基盤をつくると考えるからである。とりわけ、他者との身体的な接触を多く持つ即興的な表現とは、ダンスセラピーを提唱してきた英二（2008）が、「言葉を交わすより大きく、深く対話することができ、心と心が結ばれる」（P12）と述べているように、直接接触する皮膚だけではなく、人の内面の深いところでの触れ合いを可能にするものと考えられる。昨今、他者への想像力の欠如が社会問題化していることを鑑みても、幼少期に、人間の根幹である「身体」を介して「心」のやりとりをすることは、大きな意義があるだろう。また、他者と出合い、関係性を築いていくプロセスは、自己の存在を再構築するプロセスとしての意味をもつだろう。

本研究は、こうした観点から、創造的な身体表現の可能性に着目するものである。これについては、すでに身体教育・感性教育において、多くの実証がされてきた。たとえば西（2005）は、創造的な表現とは「自分以外の他者やものと出合い、それを自分自身のなかにイメージとして取り込み、再びからだを通して外部に溢れさせるような」（P127）ものであると述べ、「子ども自身が感じたり考えたりする感性をくぐり抜けてこない表現や、からだや動きをいろいろに使うことへの探求の薄い表現」（P127）は、創造的な自己表現につながりにくいと指摘する。このように他者やモノとの出合いを通して、創造的な自己表現を引き出そうとする活動は、特に保育・幼児教育の場で実践されてきた。また、ダンスが必修となった学校教育においても、創造的な身体表現は注目されており、自己表現に主眼点を置いた指導案が多数提示される中で、いかに仲間と共に動き、創造へとつなげるかの道筋が提示されているものもある（全国ダンス・表現運動授業研究会、2011）。

以上のように、創造的な身体表現の概念は、保育現場や教育現場などで十分に培われてきた感があるが、特に近年関心が寄せられているのは、他者との共創的な表現についてではないかと思われる。

これらに加えて、本研究では、地域の場での実践という視点も入れたい。多様な人たちが集う地域社会での、いわゆる教授型の「ダンス教室」ではない身体表現活動は、全国的にみても多くはない。ス

ーツの中でも、特に感性的側面が強いダンスの特性をいかして、柔らかかに「人」とつながり、ゆくゆくは「地域」とのつながりへと発展していくような地域活動を展開できないものか。本研究が地域と身体表現とを結ぶパイロットスタディになることを期待して、様々な年齢の子どもたちが集う地域活動の一つとして、身体表現あそびを試みた。

## 2. 目的

本研究は、地域で生きる多様な子どもたちの身体表現活動において個々の表現と集団の表現とがどのような関係の上で生成されるのかを検証し、効果的なプログラムを提示することを目指した。また、約半年間という短期間ではあるものの、継続したことの意義を検討する。さらに、子どもと共に参加した保護者にも着目し、保護者自身に何がもたらされたのか（あるいはもたらされていないのか）を考えたい。

## 3. 方法

研究方法は、①表現あそびプログラムの実施、②記録とインタビューの検討、③保護者の感想の分析、の3つである。それぞれについて、詳述する。

### ① 表現あそびプログラムの実施

実施地は、関東地方のC県M市とした。当該地域は、東京近郊の都市であり、育児サークルや子ども支援のNPO活動などが盛んな地である。しかし、本研究で実施するような表現あそびの地域活動は前例がないため、活動初期の研究として適していると同時に、長期的な活動へと発展することが見込まれる。また、JRの駅から徒歩5分ほどの場所にフリースペースがあり、舞踊に適した設備が整っていること、他の地域活動の拠点としてすでに機能していたことなどを鑑み、表現あそびの会場に選んだ。

2013年8月に、会場の下見を兼ねて、少人数（子ども2名、保護者2名、支援者2名）での模擬的な表現あそびを実施した。そこでの反応や聞き取りをもとに、9月からの表現あそびの内容を検討した。なお、本研究でいう「支援者」とは、表現あそびを計画し、実践を支援する立場の者をさす。舞踊学専門の本研究者を中心として、音楽リズムの実演者と造形の実践者とが、支援補助として携わった。

表現あそびを実施したのは、2013年9月から2014年2月までの約半年間、合計9回であった。9月～11月は、毎月1回、土曜日か日曜日の13時から14時の1時間で実施した。土日のどちらかしか参加できない人が多数いたため、12月～2月は、土曜日と

日曜日のそれぞれに実施するように変更し、時間も1・2月の日曜日は11時から開始とした。表現あそびのテーマは月ごとに変えて、使用するモノも変化をもたせた。期間中は、ポスターとチラシを作成し、地域住民を中心に参加を呼びかけた。それらには研究の一環であることを明記し、可能な範囲でレクリエーション保険に加入した。

## ② 記録とインタビューの検討

毎回の表現あそびの様子は、デジタルビデオカメラ1台とデジタルカメラ1台で記録した。この記録を用いて、言語による感想からは抽出できないような、身体表現の特徴を検討した。

また、保護者2名と支援者1名を対象に、インタビューをおこなった。対象とした保護者は、5歳女兒Aの母親Bと、4歳女兒Cの母親Dである。それぞれの参加回数は、A・B:4回、C・D:6回となる。保護者の立場から、子どもの身体表現をどのように受けとめているのかを検討する目的で、半構造化面接をおこなった。

なお、すべての記録は参加者の署名をもって同意を得た。またインタビューは、研究目的や活用範囲等について文書と口頭で説明し、「同意書」への署名を得た上で実施した。

## ③ 保護者の感想の分析

11月・12月・1月の5回にわたり、保護者にアンケート形式の感想記入を依頼し、収集した。回答者

数は、述べ22名である。9・10月は、参加者が表現あそびの場に慣れることを優先して、記述ではなく口頭で感想を聞くにとどめた。2月は、参加者の時間的都合により、記述できない状況だったため、口頭で感想を聞いた。

収集した感想を、KJ法(川喜田1967,1986)で分析し、質的内容を検討した。分析は、本研究の表現あそび活動に携わってきた支援者3名(本研究者含む)によっておこなった。

## 4. 結果および考察

3の方法で総合的に検討した結果と考察は、以下の通りである。

### ① 参加状況

計9回の表現あそびの実施日時・参加人数・テーマは、表1に示すとおりである。最も少ない回が6名、最も多い回が28名となり、幅が大きい。これは、参加者を固定しない自由参加であったことから、当日の天候や体調、近隣の学校行事との重複等による影響を受けたものと思われる。参加者は、ほとんどが子どもと母親(父親、祖母の場合も)の組み合わせであり、子どもの年齢は0歳~9歳であった。これまで参加した親子(家族)は、計16組である。そのうち1度のみ参加は4組であり、それ以外の12組は2~9回の参加であった。

表1. 実施日時・参加人数・表現あそびのテーマ

実施日	時間	A子どもの人数(年齢)	B保護者の人数	A+B	テーマ	備考
2013.9.21(土)	13:00~ 14:00	11人 (0,1,3,4,6,8歳)	9人	20人	海、布(小~大)	
2013.10.20(日)	13:00~ 14:00	9人 (4,5,6,7,8歳)	7人	16人	ハロウィン、布(中~大)	豪雨
2013.11.17(日)	13:00~ 14:00	10人 (4,5,7歳)	9人	19人	光と影、ホタル(ミニライト)	
2013.12.14(土)	13:00~ 14:00	5人 (3,4,5,7歳)	2人	7人	クリスマス、風船	
2013.12.15(日)	13:00~ 14:00	11人 (0,1,4,5,7歳)	8人	19人	クリスマス、風船	
2014.1.18(土)	13:00~ 14:00	4人 (4,7歳)	2人	6人	正月、太鼓、鈴	雪
2014.1.19(日)	11:00~ 12:00	17人 (1,2,4,5,7,9歳)	11人	28人	正月、和 문화	雪
2014.2.15(土)	13:00~ 14:00	5人 (4,7,9歳)	3人	8人	雪、綿	雪
2014.2.16(日)	11:00~ 12:00	6人 (1,4,7,9歳)	4人	10人	雪、綿	学校行事あり

表2. 表現あそびのプログラム・計画例

表現あそび～①正月を題材にストーリーを考えて表現する ②太鼓や鈴と一緒に表現しよう 2014年1月18日(土)、19日(日) 約60分 支援者:3名(舞踊、音楽リズム、造形) 準備物:中太鼓、舞太鼓、キップ太鼓、鈴、音楽デッキ、楽譜、CD、白布(大)、参加者名記入用紙、アンケート、筆記具、マジック、ビデオ、三脚、デジタルカメラ、ウェットティッシュ、クレヨン、構造紙、ポスター、チラシ					
段階	時間	内容	詳細	留意事項	環境
導入		自然な始まり	・感受性を育む ・体を動かす ～体の対話を通して、心と心の対話 ・子どもとしっかり向き合い、じっくりと関わる時間を楽しむ ・記録(撮影・録音)について	・親しみやすい雰囲気作り ・交流が生まれる様な雰囲気づくり	・自然なスタート ・あまり厳格にはしない
	3分	からだを心をはぐす	・自由に歩きまわり、出会った人と手や頭などを合わせて「こんにちは!」 ・スキップでも 音楽:リズムカルな明るい曲	・勢いのある音楽、楽しい雰囲気で緊張をほぐす ・初めての人も身体が硬直して対話 ・大人にも参加を促す	・空間を大きく広く使う
	3分	いろいろな動き	・音楽にあわせて、大きく・小さく・ふわ～・しゅるしゅるなどの動きをやってみる ・誰かを真似してみよう	・音楽の雰囲気をとらえて、いろいろな動きを全身でおこなう ・大小、高低、遅い早いなど	・空間を大きく広く使う
展開①	10分	音楽にあわせて親子で自由にからだを動かす	・1対1で向き合合って、手をつないだりくるくる回ったり ・疲れていたら、座らせて、何組かで順番に ・親子以外の2人組で(今日のテーマに関連して、ゆっくり動く、そーっと動く、優雅に動く等)	・自由に気持ちよく ・お互いを感じあいながら ・大人も動きに駆り出す	・空間を大きく広く使う
展開②	15分	イメージを膨らませる ↓ ストーリーをつくる	・お正月のあそび・食べ物・季節の感じから「どんなあそびをしたの?」「何を食べたかな?」「雪はどうだった?」 音楽:和楽器の明るい曲 ・正月遊び(例:コマ、凧揚げ)を表現してみよう。食べ物(例:もち)を表現してみよう。雪になってみよう(例:ふうわり、激しく、しんしん、真っ白、冷たい、やわらかい)。	・問いかけて、出てきたイメージを膨らませながら、自然に表現へ ・楽しい雰囲気をつくる	・空間を大きく広く使う ・動くときにぶつからないよう気をつける
休憩	5			水分補給、トイレ	・具合が悪い子がいないか
展開③	10分	鈴と太鼓との出会いと気づきの広がり	・鈴をとり出す ・1人1本ずつで、しばらく自由にあそぶ 「どうやったら、音がするのかな?」 おもしろい動きが出たら皆で真似する ・太鼓をとり出す 〃	・鈴と太鼓の取り出し方に工夫(期待・興味を持たせる) ・自由な発想を引き出す ・使った方を工夫するように言葉掛け ・鈴と太鼓の質感も体で感じる ・いろいろな表現があることに気づかせる	・動くときにぶつからないよう気をつける
発展	10分	イメージを膨らませた踊りを皆で踊る	・鈴と太鼓で簡単なストーリーをつくる ・ストーリーを考えて、一緒に表現しよう ・ストーリーをつなげて、みんなで表現する(お祭りのように) 音楽:和楽器の曲	・音を出す世界からイメージを広げる ・「おどるの?」「子ども・保護者からの提案を待つ ・できれば展開①②③で出てきた動きを取り入れる ・みんなで表現をしながら、物語をつくる楽しさを味わう ・鑑賞一認めあう・共有する体験	・動くときにぶつからないよう気をつける
まとめ	5分	心身を落ち着ける	・1対1で向き合う静かな動き、ギュッと抱きしめあう 音楽:静かな曲	・子どもたちの興奮を鎮め、整理段階へと導く ・親子のふれあい 愛着を確認	・広がる
交流の時間		感想、懇談、自由あそび	・ひとりずつ、感想を言い合う ・記念撮影 ・アンケート(振り返り) ・構造紙に絵をかいたり、太鼓で遊んだり自由に過ごす	・みんなの前でひとことずつ言える雰囲気に	

## ② 個々の表現を深めて集団の表現へ

表2は、2014年1月18日・19日に実施したときのプログラム(計画)である。網掛け部分は、毎回おこなっている内容で、白い部分がこの回のテーマに沿った内容となる。18日は6名(子ども4名)、19日は28名(子ども17名)と、参加人数の差が大きかった2日間である。内容は、両日ともに「展開①正月をテーマにストーリーを考えて表現する」「展開②太鼓や鈴と一緒に表現しよう」だった。

18日は人数が少なく、一人一人のスペースを広く使え、おおむねプログラム通りに展開した。正月あそびのイメージから、太鼓や鈴を使ったストーリーまで、ひとつながりの表現となっていたのである。

一方、19日は、1歳から9歳までの子ども17名を含む28名の参加があった。会場の広さを考えると、バラバラに走り回ることが危険だったため、

自由な動きの場面では、緩慢な動きや、床を転がる動きなどを多用した。また、正月をテーマに動きを発掘する場面では、個々の空間を保ちながら、じっくりと表現に向き合えるように、より具体的なイメージを引き出すよう心掛けた。これによって、多彩な表現が出てきたので、グループでストーリーを考え、発表するという展開にした。「冬」や「雪」を題材としたところ、「こたつで雪あそび」「みんなで雪だるまづくり」「つららと雪合戦」といった、ユニークな発想の表現が生まれた。

この創作発表については、保護者の事後感想(アンケート)で、「もっとも印象に残ったこと」に9人中7人があげていた。そのうちの一人は、インタビューのなかで、「創り出していくということが、どんなことなのかよくわからなかったけれど、このときにわかった気がしたし、一体感を味わえた」と

述べている。こうした創作発表ができた理由のひとつに、ほとんどの子どもたちが複数回目の参加で、ある程度、表現に慣れてきたことがあげられよう。

結局、この日は展開②をおこなわず、終了後の自由あそびの時間に、各自が太鼓や鈴であそぶにとどまった。

以上のことから、参加者の人数や顔ぶれ、反応によって展開の変更が必要であることは言うまでもないが、テーマ、物、音楽等に季節感、日常性、非日常性などを混在させた上で、個々がもつイメージ世界をじっくり深めさせることが、集団での豊かな表現につながっていくのではないかと考える。

### ③ 子どもたちの表現～からだに表れることと保護者の気づき

記録や保護者の感想・インタビュー等をもとに、3つの事例を検討したい。

#### <表現に没頭する女兒A>

インタビューをした保護者Bは、我が子である5歳女兒Aが表現あそびで見せる姿に驚いたと述べた。Aのことを、「人のお世話役に回ることが多い優等生タイプ」と考えており、表現あそびでも支援者の言葉がけのおりに動くものと期待していた。この期待通り、初参加のときのAは、布を遠慮がちに持っていく、ぎこちないながらも一生懸命周りについていこうとしていた。

しかし、回数を重ねるうちに、「自由な」表現に興じる姿がみられるようになった。たとえば、カラフルな風船を大事なものに見立てて、そっと動かそうとする場面で、壁に向かって風船を力いっぱい打ちつけ、弾けるように跳んでいくのを追いかけたり、寝そべっていつまでも風船をじっと見つめていたり、親から見たら「言うことを聞いていない」状態がみられたのだ。このときのAは、人目（親の目）が気にならないほど、自分だけの表現世界に入り込んでいたと考えられる。自身の心を、風船という対象物に深く寄せていたのだろう。

このあと、風船を大事な贈り物に見立てて誰かに送るというストーリーを皆で表現した。その際、Aは、まるで今にも割れそうな卵をそっと包むかのような細やかさで、ゆっくりと風船を運ぶ表現をしていた。

#### <回数を重ねて親子関係が変化した女兒C>

4歳女兒Cは、表現あそびに6回参加した。各回を振り返ると、表現に入り込める時と、入り込めない時の差が大きく、嫌なことがあると部屋から出て行ってしまうこともあった。モノや人への執着が強く、他の子どもとトラブルになることもあった。そ

のようなCが、すんなりと表現に入り込めたのが、「海の生き物」であった。表現あそびのテーマによっては、絵本を広げながら、その世界であそぶこともした。「海」の絵本は、初回に扱ったが、その後も、導入での動きにとり入れることが多かった。Cは、そうした「海の生き物になる」表現が好きで、ジャンプをしたり転がったりと、他の人をひっぱりこむほどの動きをしていた。母親であるDは、「日常生活でも、イルカに興味があった。表現あそびをすることで、自分自身のなかに自分だけの“イルカ”をつくることができたのかもしれない。イルカになりきって、イルカの気持ちになっていたのが、見ていても嬉しそうだった」と振り返り、Cの気持ちに寄り添った。

また、最近の表現あそびの様子について、Dは「最初はしばらく“ママと自分”という感じだった。それが今は、“みんなと自分”という感じで、あまりべったりしてこなくなった」と語った。これと同様の気づきは、他の4歳児の母親からも聞かされたことがある。表現を通して、他者との関係の再構築をはかっている可能性があると考えられる。

さらに、家でも、Dの出勤前に、表現あそびで毎回おこなう「ギュッと抱き締めあう」一連の動きをすると、お互いに笑顔で別れられるようになったと話していた。アンテナが鋭く反応してしまいがちな子どもほど、表現世界とのつながりが深くなると思わせるエピソードである。

#### <初参加の男児Eと周囲のかかわり>

表2で示した2014年1月18日は、4歳の女兒2名と男児1名（E）、7歳の女兒1名と、保護者2名の参加だった。そのうち初参加だったのは、4歳男児Eの母子だけであった。少人数でのびのびと動ける空間であったが、Eには硬さがあり、なかなか母親から離れられなかった。

そのようなEを見て何かを感じたのか、他の子どもたちが自発的・積極的にEに働きかける様子が観察された。たとえば、Eが母親の足に巻きつくようにしていると、皆がコマや凧になったりして、男児にかわるがわる軽く触れる。そして自然と手をつなぎ、表現の輪ができていった。

また、小さな太鼓を手を持った時は、Eと支援者との間で、交互に太鼓を打つ表現が生まれた。これは、あたかも太鼓を通して会話をしているようであった。また、Eの母が、太鼓を手で、大きく円を描くように動くと、他の子どもたちも同調した。勝手気ままに動いているように見えても、なんとなく互いを意識しあっていることが伺えたのである。個の動きが、集団の動きへと展開していった場面と考え

る。

このように、少しずつ表現で皆とつながる場面もあったのだが、母は、あまり楽しんでいない印象をもっていたという。これについて母は「言われたことを全然やろうとしなかったの・・・」と振り返っている。しかし、家でも表現あそびの話をよくしていたらしく、翌日の表現あそびにもE親子の姿があった。E 成りのペースで、表現を楽しんでいたことがうかがえる。こうしたEの姿は、母に、「子どもの表現を“待つ”ことが大切なんです」という気づきをもたらしていた。

④ KJ 法分析による保護者の感想

図1は、保護者の感想（アンケート）をKJ法にもとづき分析し、概念を図式化したものである。内容としては、「子どもの参加態度」「モノとの関わり」「他者との関係」「身体表現の反応と捉え方」と、その他とがあった。これらの記述内容に基づき端的に文章化すると、以下のように整理できると思われる。

<身体表現あそびについての保護者の感想>

保護者は、表現あそびをする我が子を見て、楽しんでいると感じると同時に、普段とは違う姿に気づく。表現あそびとは、日常とは異なる方法で

モノと出会い、何かになりきったり、みんなでストーリーをつくったりする、創造性の高い行為である。そして、表現力・コミュニケーション力を高める。また、保護者自身も、身体表現を通して、これまでにないような我が子あるいは他の人とのかかわりを持つたと自覚している。特に、活動の最初と最後に、1対1で即興的に表現する場面で、他者との関係が意識される。その一方で、自由に表現することの難しさや不安を感じることもある。家でも、コミュニケーションの場面などに表現あそびでの体験が出始めている。全体的に身体表現を好意的に受けとめており、継続参加を希望している。

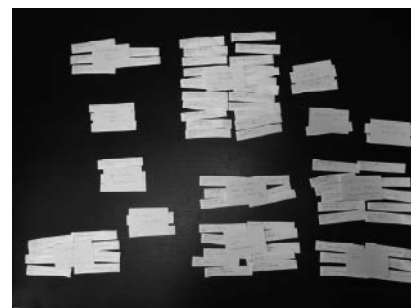
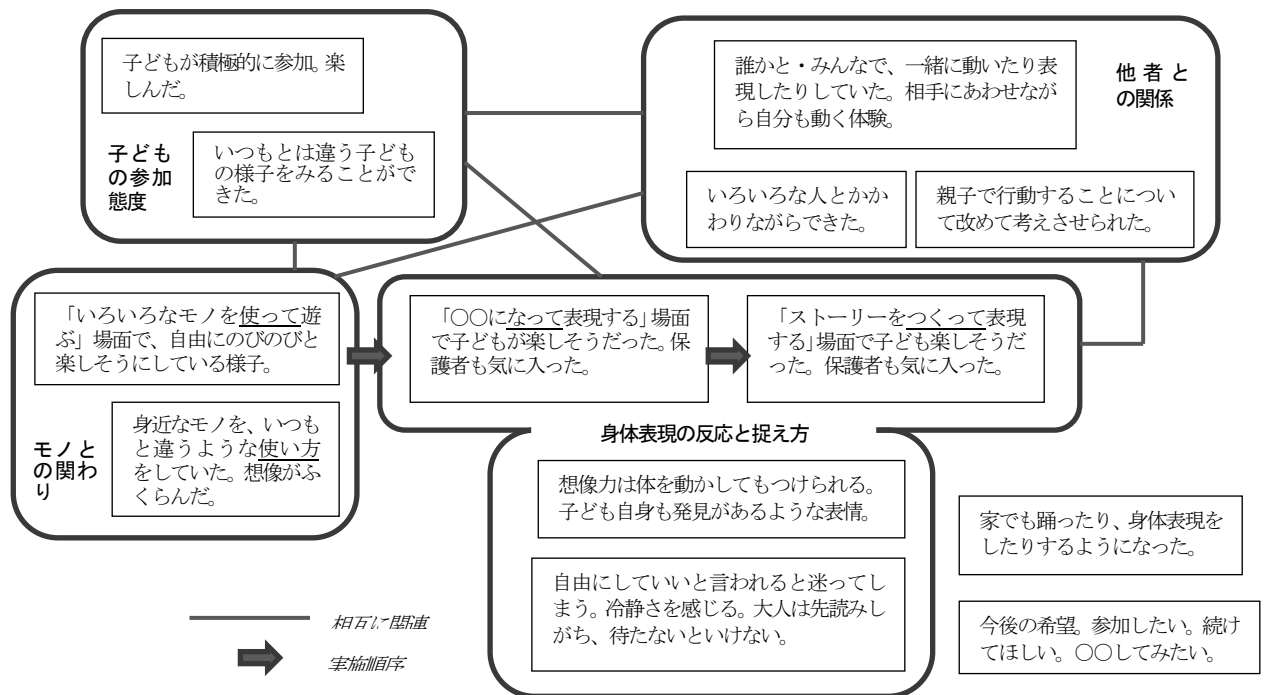


写真. KJ 法分析の実際：ラベル数 82 枚



テーマ3  
一般  
奨励  
子ども・青少年スポーツの振興に関する研究

## 5. まとめ

本研究は、地域活動としての子どもの表現あそびを通して、個々の表現と集団の表現とがどのような関係の上で生成されるのかを検証し、プログラムを提示することを目指したものである。結果をまとめると、次のようになる。

- ・ テーマ、物、音楽等に季節感、日常性、非日常性などを混在させ、個々のイメージ世界を深めることで、集団の表現に発展した事例が認められた。
- ・ 活動の最初と終わりに1対1での表現をとり入れたことで、他者との表現が促されたと考えられた。
- ・ 子どもは自身の表現に夢中になる傾向があるが、次第に他者の表現を受け入れ、一緒に表現しようとする場面が認められた。
- ・ 一緒に参加した保護者には、子どもに対する新たな気づきもたらされていた。一方で、自身が身体表現することへの戸惑いや、我が子の行動への不満などがみられた。

以上のように、個々の表現から集団の表現へと移行するためには、個々の自由な表現を触発し、認め合い、共有しようとする雰囲気ならびに柔軟な内容が重要と考える。約半年間という短期間であったものの、継続したことで、表現の質の変化ならびに参加者自身の変容を抽出することができたのではないだろうか。また、毎回の問題をフィードバックしながら続けてきたゆえに、プログラムの内容もある程度精査できたのではないかと思われる。

しかしながら、プログラムの有効性については、充分検証できなかった。なぜならば、いくつかの課題が残っているからである。たとえば、地域活動ならではの参加者の多様性を、どこまでプログラムに反映できるのか。保護者の積極的参加を促すためには、何が必要なのか。これらの課題について、先行研究や実践の検討をさらに重ねる必要があり、地域活動としての緩やかさを保ちながら、今後も実践研究を続けていきたい。

### 参考文献

- ・ 英二三枝子 (2008) 「ダンスのもつ力と可能性を考える」『体育科教育』3月号、P10-13.
- ・ 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論社.
- ・ 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法混沌をして語らしめる』中央公論社.
- ・ 西洋子 (2005) 「子どものからだの表現」日本学術会議文化人類学・民俗学研究連絡委員会編『舞踊と身体表現』、日本学術協力財団、pp119-130.

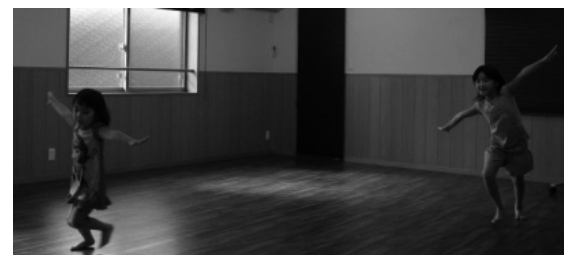


写真 表現あそびの様子

- ・ 全国ダンス・表現運動授業研究会 (2011) 『明日からトライ！ダンスの授業』大修館書店.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。